

令和 3 年 5 月 28 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K04165

研究課題名(和文) 短期の解決規則ネットワークの生成モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of a generative network model for solving problems

研究代表者

大下 由美 (Oshita, Yumi)

県立広島大学・保健福祉学部(三原キャンパス)・准教授

研究者番号：00382367

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、短期にクライアントの問題ストーリーを変容できる、ソーシャルワーク・モデルを提示することであった。クライアントの問題ストーリーが、言語行為の構成要素の一つである期待の交換過程、つまり、人が物象化されたりものがヒト化したりする過程で、生成されることを示した。そして期待の構成要素を変容する技法として、循環的質問法を位置づけ、略記号を用いて介入過程での変容力学を視覚化した。本モデルの有用性は、複数の事例分析を通して示された。過敏性腸症候群のクライアントの事例では、もののヒト化過程における意味の差異化から、ヒトのモノ化の力学を変容し、解決ストーリーを短期に生成した過程を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内のソーシャルワーク実践の研究において、支援論に関する理論的および実践的研究が進展していない中で、変容論に関する理論的考察のみではなく、臨床的研究に取り組み、変容の構造と力学の精緻化を図った点、そして変容に寄与する専門職の介入手法や効果測定法についても明らかにした点は、学術的意義があると考えられる。また、社会的意義としては、サービス導入型のアプローチでは解決できない、クライアントの対人関係上の問題の解決に資するモデルとして本モデルが適用できる点である。昨今の家族や地域の問題解決力の衰退に対し、専門職の関与により、問題解決のコミュニティづくりが可能になることを示した点は、本研究の成果と考える。

研究成果の概要(英文)：The aim of the research is to present a new social work model which can transform a client's problematic story in a short time. The methodology is as follows. The client's problematic story is defined as a construction in a process of exchanging speech acts. One of elements which composes the speech act is identified as an expectation. The fixed expectation is defined as a patterned meaning of the objectified person and the personalized material object. In addition, Circular Questions are critically examined and then systematized as the intervention skills to generate a coding method. The clinical effectiveness of this model was demonstrated through case studies. The example case of the client with irritable bowel syndrome was demonstrated as an example of a transformation process of a fixed expectation. A solution story was potentiated by differentiating her meaning of the personalized material objects which then enabled the generation of her new story.

研究分野：臨床家族社会学

キーワード：ネットワーク 差異 システム コミュニティ 四肢構造 循環的質問法 効果測定

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 家族、地域の問題解決力の低下とそれへの支援法の構築の必要性

国内の福祉実践においては、伝統的な地域社会の根源的な変容が生じ、その自明性が揺らぐ中で、制度化された福祉プログラムに依拠した旧態依然とした支援方法の限界が顕在化してきている。それに対し、米国においてはコミュニティが生成的に捉えられ、生起する諸問題に対して、理論と技法に裏付けられた支援が試みられている。それゆえ、米国のコミュニティ・ワークの理論に学び、さらにそれを発展させた、新たな地域支援法の構築が求められている。

(2) 実践の基礎理論の洗練化を図る必要性があること

複雑な過程への関与を必要とする福祉実践における実践論の研究を進めて行く必要がある。先行研究において、社会システムの変容の変数を意味構成と行為選択に特定したが、変化が生じる過程の説明力はいまだ十分とは言えない。システムを構成する1つのサブシステムにおける微細な差異が、システム全体の差異生成力となる過程を説明できる、理論的な枠組みの構築が求められる。しかしながら、それは明らかにされていない。それゆえ、その理論に基づく変容論、技法論、そして効果測定論の体系化も、未完成と言える。この社会システム内での変容ターゲットの変数の明確化という課題に対して、理論的な考察を継続する必要がある。

(3) 変容法の定式化と、技法の効果的な使用方法について明らかにする必要があること

社会的な関係への関与を効果的に実施するための方法を明確化していく必要がある。これまでの支援者が使用できる質問法は、循環的質問法とそのほかの質問法を組み合わせた体系が示されていた。しかしそれらの使用法は、いまだ十分に具体化されていない。訴えを出来事として語ってもらうために使用する技法、変数を抽出するために試みる質問法、そして、抽出された要素の差異化に使用する質問法、あるいは微細な差異の生成力をさらに拡大させていく段階で使用する技法など、様々な次元で、技法論研究を進展させていかなければならない段階にある。

(4) 精緻化された介入ポイントへの介入効果を測定する測定法を構築する必要性があること
福祉実践の効果測定法は、未構築である。この課題への取り組みは、申請者の研究の発展として進める。実践論の精緻化を図るとともに、効果測定法についても洗練させていく必要がある。

(5) 国際共同研究の遂行とその結果の公開が求められること

ソーシャルワーク実践に関する国際共同研究(特に、臨床の実践過程を共同研究として形にした研究)は、皆無に等しい。また、海外から輸入したモデルに基づく実践ではなく、国内で研究開発を行ったモデルを海外で発表し、その臨床への適応を試みる研究は、これまでほとんどなされていないため、重要な研究になると考える。それらを遂行することで、本モデルが国際レベルで通用するモデルとして発展するよう研究成果を示す必要がある。

2. 研究の目的

(1) クライアントの社会適応上の問題解決に資する、社会構成主義的視点からのソーシャルワークの生成モデルを構築すること

特に疾患や障害を有する人の問題解決を、コミュニティの中で解決するモデルの構築を目指した。哲学的基礎にハイデガーのケア論を採用し、人とのへのケアを期待により持続するトランズアクション過程における人とのもの生成理論に組み換え、社会生活の経験的基礎理論とする。この理論が描き出す、期待に焦点化した人とのものを生成する言語行為群を变化の対象とする実践の体系を示す。

(2) 先行研究のモデルよりも、理論的精度を上げること

申請者が提示してきたモデルの理論的研究を継続し、先行研究において構築した概念、特に変容に資する要素を、明確化し、その要素への体系的な技法使用法を整備し、実践の効果測定法を体系づける。

(3) 本モデルの臨床での有用性を示すこと(国際研究を含む)

国内外での研究環境を活用して、臨床実践研究を行い、その成果を学術論文として公開する。

3. 研究の方法

本研究では、理論的研究と臨床的研究の両面で、研究が遂行された。

(1) 理論的研究の方法

理論的研究においては、支援の基礎理論の整備とそれに基づく変容論、技法論、および効果測定論の考察を行う。基礎理論においては、思想的にはハイデガーのケア論に依拠し、ケア実践の交換過程として、社会の生成力学が定義づけられる。この社会システムにおける、ケア実践の交換過程は、社会的行為理論の知見、つまりオースティンによって提唱された言語行為論を採用することで、日常世界の地平の概念へ組み替えられる。このケア実践の交換過程において構成される日常世界の変容論は、言語ゲーム理論の知見を取り入れた、CMM (Coordinated Management of Meaning) 理論を加え、実践における社会理論の土台とする。このネットワーク生成の構成要素は、構成員間でのトランズアクションなケア実践である。そしてその過程の説明力を有する概念は、期待と定義される。それゆえ、変容活動の焦点を期待に設定する。そして差異化の介入ポイントとして、期待の要素の精緻化が試みられる。

(2) 臨床的研究の方法

本研究での臨床研究法は、事例研究法である。上記の理論的研究に基づく実践が、臨床において遂行される。同様の手法で、国内外の臨床研究がおこなわれる。面接過程は、全て逐語記録の形で事後的に記録する。これを分析対象のデータとする。この分析データの中で、期待の要素を介入ポイントとし、差異の生成技法として、循環的質問法(**Circular questions**)を位置づける。この質問法の類型群を用いて、変容対象である期待の要素への関与過程を示す。そしてそれを用いて、変化の対象の選択とその変容力学の考察を試みる。

さらに、実践の手順も、定式化された、以下の **3** つのステップとして理論化される。**1** つ目は、クライアントの訴えから支援を開始し、訴えを出来事レベルで記述するよう促す段階である。**2** つ目は、記述された出来事を、さらに具体的な行為と意味と期待の要素を明確にするよう、記述を促す段階である。**3** つ目は、クライアントによって要素化されたものに対し、リフレクションを試みる段階である。

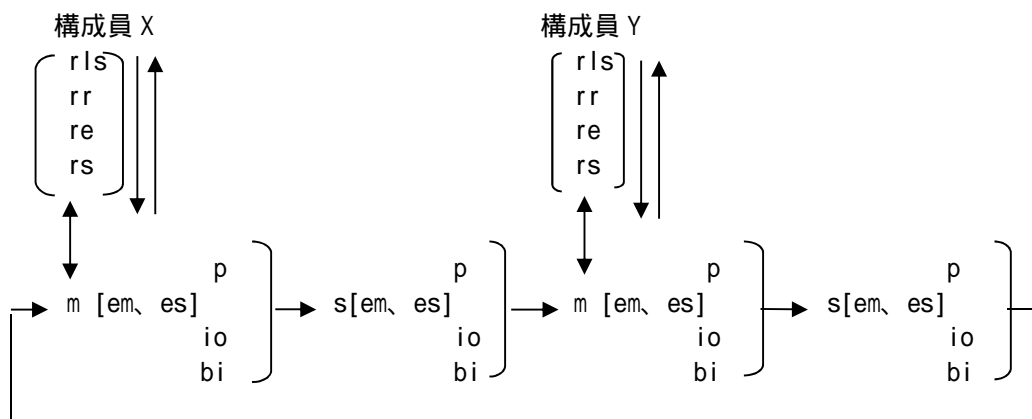
この手順を踏まえた面接過程の逐語記録から、使用した技法の分類、効果測定のためのカテゴリー化を行う。その際は、本研究の理論的枠組みを共有する複数名で実施する。技法の分類は、循環的質問法の類型に、期待の類型化を加えた分類表を用いる。効果測定法は、期待の要素を、ベールズ(**Bales, R. F.**)の相互作用過程のカテゴリーを用いてカテゴリー化し、**3** 次元グラフでその力動性の変化を示す。

国内における臨床研究では、個別支援およびコミュニティ支援の両支援対象での実践を行う。研究協力の同意が得られた対象者に対し、対象者の訴える問題の解決を、本支援モデルに基づき実施する。研究代表者は、直接臨床事例には関与せず、研究協力者が実施する面接へのスーパーバイザーとして関与する。また米国研究者との国際共同研究での臨床研究は、慢性疾患を有する個別支援事例を中心として実施する。本研究で構築するネットワーク・モデルの理論を共有するためのディスカッションを共同研究者と行い、そのうえで、米国内での臨床事例に本モデルを適用し、その有用性を、逐語記録のデータ分析を通して検証する。面接の実施後に研究代表者と研究協力者でミーティングを継続的に行う。

4. 研究成果

(1) 問題解決ネットワークの相互生成構造と過程

図1は、本研究により整理された、期待の変数を加えた、ネットワーク生成のための実践論の枠組みである。



io: inanimate object での、bi: body image で身体、p: person で人の行為や思考、s: s speech act で言語行為、m: meaning construction で意味構成、e: expectation で期待、rls: rule of life script で自己定義の規則、rr: rule of relationship で関係性の規則、re: rule of episode で出来事定義の規則、rs: rule of speech act で言語行為の規則を意味する。

図1 水平・垂直のフィードバック・ループ(大下、2019)

図1では、構成員Xと構成員Yのトランザクション過程において、相互に日常世界を構成する変数が具体的に示されている。構成員Xの構成員Yの行為に対する意味構成は、6つの変数から生成される(m-em-p, m-em-io, m-em-bi, m-es-p, m-es-io, m-es-bi)。それは、これらの変数が、介入の要素とされることを意味する。同じように、行為選択の局面でも6つの変数が想定される。それゆえ、期待の要素および人との軸を入れ込むことで、構成員Xが構成員Yとの間で構成する、問題定義を含む日常世界は、これら複数の変数を介入ポイントとして選択可能となる。図1で示すように、一つの変数における差異の生成は、他の局面に影響を及ぼす。それゆえ、ミクロな変化からシステムレベルの変化までを短期に引き起こすことができるモデルであることが示された。

(2) 介入ポイントに適用する技法の類型と使用法を示したこと

以下の表では、循環的質問法を、精緻化された介入ポイントに使用した場合の新たな類型記号を示す。紙幅の都合で、对人的側面と対物的な側面を区分する略記号の提示は省略する(大下、

2019を参照のこと) 表1の「e」は、expectationの略である。

表1 循環的質問法の類型と略記号一覧(期待)

1. 差異の質問 (Difference Questions: DifQ)			
大類型	小類型	略記号	
1) カテゴリーの差異 (Category Differences)	a) 主体間での期待と期待	eCDa	
	b) 関係と関係	eCDb	
	c) 認識、思考、あるいは信念	eCDc	
	d) 期待群	eCDd	
	e) 過去における期待の類型の差異	eCDe	
	f) 未来における期待の類型の差異	eCDf	
2) 時間的差異 (Temporal Differences)	a) 過去と過去	eTDa	
	b) 過去と現在	eTDb	
	c) 過去と未来	eTDc	
	d) 現在と未来	eTDd	
	e) 未来と未来	eTDe	
3) 差異の順序付け (Ordering a Series of Differences)	a) 1人による区分	eOSDa	
	b) 複数人による区分	eOSDb	
2. 文脈の質問 (Contextual Questions: ConQ)			
1) 時間的文脈 (Temporal Contexts)	a) 2者間での期待の作用	eTCa	
	b) 3者間での期待の作用	eTCb	
	c) 複数人での期待の作用	eTCc	
2) カテゴリー的文脈 (Categorical Contexts)	a)	-1 他者より送信された期待への主体の意味構成を文脈とした、主体の期待送信	eCCa1
		-2 主体の期待送信を文脈とした、他者の期待への意味構成	eCCa2
	b)	-1 言語内容を文脈とする期待への意味づけあるいはその逆	eCCb1
		-2 期待を文脈とする出来事定義あるいはその逆	eCCb2
		-3 出来事定義を文脈とする規則化された関係性の定義あるいはその逆	eCCb3
		4、関係性の定義を文脈とする世界内での自己存在の定義あるいはその逆	eCCb4
		-5 世界内存在での自己定義を文脈とする家族神話(言説)あるいはその逆	eCCb5
-6 1-5の複合	eCCb6		

(2) ものとの相互変容過程と期待の差異化を実践事例で示したこと

介入ポイントであるものの側面での差異化を文脈に、人の側面での変数の差異化と連動させ、それらを期待の変数の差異化として結び付けていく過程が、国際臨床研究の事例を用いて明らかにされた(Oshita, Kamo and Gant, 2021)。その事例は、20歳代の過敏性腸症候群(Irritable Bowel Syndrome: IBS)のクライアントに関するもので、彼女の症状は改善しているにもかかわらず、社会活動から引きこもった状態が、長く続いていた事例である。クライアント自身は、現状の解決を希求していたが、その方法がわからない状態であった。この事例に対し、もののヒト化(羞恥心を浮上させる素材としての排泄物)の力学に焦点を当て、その差異化から、他者の行為の期待(自分への処罰の意味)への構成の差異化を図り、社会活動への参加を可能にした過程を示した。

面接過程は、以下のように、逐語記録で示され、THが使用した技法群が類型化された。技法分類の欄では(/)で2つの技法を提示している。それは、前者が主分類、後者が副分類である。これは、支援者の選択したメッセージの意図が、複数考えられることを前提に、かつ次の局面での差異化の方向性(クライアントの応答の予測)を持って選択されることを示している。ここでのTHの変化の方向性は、对人的世界での問題場面の構成要素(行為選択)を明らかにしつつ(TCb)、背後のもののヒト化(臭いがするもの)の差異化(CDc(io))を意識して、質問法が選択されていることを示している。

表 2 問題場面の構成要素の記述過程

番号	人物	逐語（和訳）	技法分類
1	TH	今日は、数日前に何が起きたのか教えてほしいのだけど	TCb/ CDc(io)
2	CL	また起こったんです	
3	TH	うんうん。ちょっと、何がおこったのかよく理解するために、もう少し聞かせてほしいのだけど。どう？いいかな？	TCb/ CDc(io)
4	CL	ええ、いいわよ。	
5	TH	ありがとう。最初何がおこったの？	TCb/ CDc(io)
6	CL	友達の家で時間を過ごしていて、私たちはリビングルームで話をしていたんだけど、彼女のお母さんが話をするために入ってきたの。その時急に、彼女のお母さんが鼻にしわを寄せて、「なんかひどい臭いがするわね」と言ったの。	
7	TH	で、何が起こったの？	TCb/ CDc(io)
8	CL	飛び上がって、涙を浮かべて「すみません、失礼します」と言ってトイレに駆け込んでドアを閉めた。	

この記述過程ののち、「臭い」は自分に存在すると根拠づけてきた「もの」についての詳細な記述とリフレクションが行われた。それを文脈に、対人的世界における他者の行為に随伴する期待の要素の差異化が試みられた。その局面の記述が、表 3 である。ここでは、ものの局面での差異化(CDc(io))から、対人的側面での他者の行為の期待の記述(eCCa2)そしてその差異化(eCCb1)が試みられている。このような過程で、クライアントは他者の行為への期待の差異化を開始した。

表 3 臭いに関する CL の期待の差異化

番号	人物	逐語（和訳）	技法分類
35	TH	もう少し聞いてもいい？あなたは今回の問題場面での排泄物にはほとんど臭いがなかったと言ったね？	CDc(io)/eCCa2
36	CL	ええ、私にはしなかったわ。	
37	TH	友達はどう？何か臭っている様子だった？	eCCa2/eCCa1
38	CL	いいえ。私はそうは思いませんでした。彼女は私が IBS の病気を持っていることは知りません。	
39	TH	彼女のお母さんは、あなたの斜め前に座っていて、どうやったら、あなた自身もそして隣に座っている友人もおそらく気づいていない臭いに、お母さんが気づくと思う？	eCCb1/CCa2
40	CL	(長い沈黙のあと)わからない。私が時々誰かが何か臭うということと言ったと思うと、自動的にそれは私のことを意味していると思っていた。そして私が IBS であることを意味していると思っていた。	

(3) 成果と残された課題を明確化できたこと

上記の事例は、ヒト化されたものの意味の差異化から、モノ化された人の行為への意味の差異化を、定式化した変容ステップにより、循環的質問法を用いて、クライアントのペースで6回行われ、終結した。そして、その後の再発もみられていない。また、面接回数は、一般的に過敏性腸症候群の患者に有効とされる CBT (Cognitive Behavioral Therapy) よりも少ない回数であった。事例数は限定されているが、本事例に対しては、本研究のネットワーク・モデルに基づく支援が、短期の問題解決を実現することにつながったと考える。

また、上記事例以外の複数の事例でも、本モデルに基づく実践の有用性が示された。それゆえ、本モデルの理論的特徴である、対人的世界でのケア実践(期待)の差異化、つまり人とももの両側面を意図的に区分しつつ、どちらかの側面からの差異化から、システム全体の差異化をもたらすという、ミクロな変化から、マクロな変化を作り出す変容論の有用性が示されたと考える。さらに、その差異化の手法が、循環的質問法を用いて試みられた過程を、記号化して考察することで、より明確に示すことができたと考える。このように、理論および変容技法の両面で、トランズアクションへの変容力を説明できた点が、本研究で明らかにできたことであると考えられる。

その一方で、本モデルをさらに発展させるためのいくつかの課題が明確になった。一つは、変容論における差異化の変数の理論的考察である。期待の変数の定義については、トランズアクション過程において、相互の行為を連結させる力学の説明としては、未だ不十分であると考えられる。二つ目は、期待の変数を明確化するための技法、あるいは明確化した変数を差異化するための技法選択法に関する議論も、いまだ体系化が不十分と考えている。最後は、これらの理論的、技術的課題を克服したうえで、既存の効果測定法の洗練化を図ることが課題であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大下由美	4. 巻 22
2. 論文標題 コミュニティの共生的支援論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Oshita, Y, Kamo, K and Larry, M. Gant.	4. 巻 1
2. 論文標題 A Narrative Approach for a Client with Irritable Bowel Syndrome	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Human Systems	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/26344041211017283	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 唐澤美加・大下由美	4. 巻 17
2. 論文標題 クライアントの問題解決力を高めるチーム・アプローチの実際	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本通訳士協会 『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Oshita Yumi	4. 巻 5
2. 論文標題 Constructing a comprehensive team approach using the refined short-term reconstructing meaningful life worlds model	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Online Journal of Japanese Clinical Psychology	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 唐澤美加・大下由美	4. 巻 16
2. 論文標題 喪失体験からの回復過程と支援論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本手話通訳士協会『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 34-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yumi Oshita	4. 巻 5
2. 論文標題 A New “Community” Organization Approach for Elderly Persons with Multiple Mental Disorders	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Cultural and Religious Studies	6. 最初と最後の頁 402-413
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.17265/2328-2177/2017.07.002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 唐澤美加・大下由美	4. 巻 15
2. 論文標題 ろう者とのソーシャルワーク実践	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本手話通訳士協会・日本手話通訳学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東幸子・大下由美	4. 巻 15
2. 論文標題 解決ストーリーの相互生成過程の分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本手話通訳士協会・日本手話通訳学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 62-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 唐澤美加・八木敬子・香川明美・大下由美
2. 発表標題 通訳者のチーム・アプローチ
3. 学会等名 第17回日本手話通訳学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 唐澤美加・大下由美
2. 発表標題 手話を用いたろう者への支援
3. 学会等名 日本手話通訳士学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yumi Oshita, Kiyoshi Kamo
2. 発表標題 Transforming the Depressive Story of an Elderly Person in the “Communities” Based on Refined Short-term Reconstructing Meaningful Life-Worlds Approach
3. 学会等名 International Conference on Education, Psychology and Society (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 東幸子・大下由美・横井麻耶
2. 発表標題 手話言語による相談援助モデルの構築 記述とリフレクション技法を中心に
3. 学会等名 第48回 日本社会福祉学会・中国四国大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 唐澤美加・大下由美・今中元基
2. 発表標題 手話を母語とするろう者とその家族への支援論
3. 学会等名 題48回 日本社会福祉学会・中国四国大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大下由美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 197
3. 書名 コミュニティ臨床論 ケア実践と課題解決ネットワークの生成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
	University of Michigan	Family Assessment Clinic		
United States of America				
Canada	University of Calgary			